

—ただキリストと共に歩む—

水戸無教會

第4号

編集 半田梅雄

信仰と宗教語——鍵はイエスが持っている——

半田梅雄

こゝにいう宗教語の範囲は一応キリスト教に限るが、未信時代の私が一番とまどい且近づき難い感じを持つたのは宗教特有の専門語である。例えば、奇蹟、聖霊、天国などは最も代表的な宗教語で、門外漢には甚だ解り悪い言葉であつた。それにやたら敬語が習慣的に用いられるのも鼻もちならぬ理由である。又私の知つた範囲の牧師さんは余りに丁重過ぎるので閉口した。勿論責むべき理由は私の方にあつたのだが、今信仰を与えられてみると、それらのすべてを身につけることが、クリスチャンに必要なことだと

考えられない。むしろそれらのすべてが不必要なものだと思ふ。キリスト教につきまといつていて特殊な儀式や、礼拝や、専門語は、人が救はれる為にはむしろ無用なものである。我々は世俗から離れて特定の教団やグループに加入しなければならぬ義理も義務もない。又宗教語と敬語を上手に使つて立派な祈りをする必要もない。ただイエス・キリストのみにたづね求めてゆけばよい。イエスは私たちにいつて永久に変わることのない眞の友であり、求める者には必ず肉眼では見ることの出来ない新しい別の世界を見せ、遂

にはそこに住まわせてくれる人である。「新しい別の世界」即ち天国は、決して空の上にあるのではない。勿論地上に文化の華を咲かせる別称でもない。

私たちが、昨日と同様に勤めを持ち、昨夜同様家庭の仕事にいそしみながら、自分が全く別な眼をもたせられて、その時、すべての謎は一ぺんに解けるのである。鍵はイエスが持つている。唯一人イエスのみが。「我は道なり、眞理なり、生命なり、我に由らば誰にても父の御許にいたる者なし。」(ヨハネ伝一四・六)

生けるキリストの信仰

その神を人類に示されたイエスはどのような人であったか、その眞の神を父とする神の子であった。イエスが神の子であるという証拠は何処にあるだろうか、マルコ伝一章を見ると、ヨルダン川に於てイエスはヨハネよりバプテスマを受けられた。イエスが水より上るとき御霊鳩の如くおのれに降るのを見られた。天より「なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ」という声を聞かれた。イエスの魂に神のみ声が響いた。『お前は神の子だ』と。彼は三十そこそこの田舎大工の息子に過ぎない。彼の両親も兄弟も尋

常の人である。神の声を魂に聞いても彼が大工である事は少しも変りがない。服装も今の私たちより貧しいものを着て居られたに違いない。自分が神の子であるという、果たしてほんとうだろうか、若しや自分は誇大妄想に捕われたのではなからうか、この大問題の為に彼は甚だしく悩んだ。そして彼の内心に激しいたゝかいが起つた。彼が常識的であればある程、理性的であればある程、そのたゝいは激しいものであつたらう。悩める彼の魂は必然的に人なき荒野に導かれた。激しい苦斗によつて食うことも飲むこと

もと絶え勝な日が続いた。この苦斗が絶頂に達し、彼の肉体が飢えの爲にもろくも崩れ去ろうとする時、最後の試練がやつて来た。サタンは巧みにも聖書の言葉で偽装して彼に迫つた。奇蹟を行う力、人の前に偉大な宗教家となる術、更に全世界の富と榮華への誘いがそれであつた。

このたゝかいに彼はいかにして勝つことが出来たか、それはこういうことである。自分が神の子であると言う証拠は、『お前は神の子だ』と言う神のみ声を彼自身が信ずる以外に何もない。『お前は神の子だ』という神の言葉、その言葉の持つ力強い響きはもはや彼の魂から打ち消すことの出来ない強大なものとなつた。もはや石をパンに変える

奇蹟によつて、その事を証拠立てる必要はなかつた。自分が神の子であるかどうか、エルサレムの神殿から飛び下りて神を試してみる必要もなかつた。更に世界の富と権力を自由に駆使して、大宗教家となつて人々の前に現われる必要も勿論なかつた。外側はいかに貧しい大工の子に過ぎなくても、それはもはや問題ではない。自分の魂に聞えた『お前は神の子だ』という神の言葉を深く固く信ずることが出来たら、それだけでよい。それ以上の証明が何の役に立つだろうか、
『サタンよ退け、主なる汝の神を拝したゞ之にのみ事へ奉るべし』彼はこうして確信と勇氣に満たされてサタンを退けることが出来た。そしてこ

の朝を境として、イエスの神の子としての公生涯が始まったのである。病める者を癒やし、悩める者を導き、たゞ神の命じ給うまゝに働き、遂には神の命に従う為にユダヤ人としては最も恥づべき極刑である十字架の死を受けるのである。彼は神の子として生き、神の子として死んだ。然し十字架も、死も罪も遂に彼を滅ぼすことが出来なかった。神は三日目に彼を復活せしめた。キリストの中に宿つた神の子たる生命は十字架によつて滅びなかつた。彼は永遠の生命として神と共に在し給う。黙示録五章六節に

「虐げられたるが如き羔羊の立てるを見たり」とある。これがイエスの姿である。おのが血をもつて全人類の罪をあがない給うた。神はみ子であるキリストを死の十字架に渡し給ひ、これを三日目に解き放ち、死人の復活を現わし給うことによつて、神がすべてに勝るみ力からの所有者であること、イエスが神の子であることをあきらかにされた(ロマ書一・四)のである。

これは単に二千年前のユダヤの国の出来事であつただけではない。復活のキリストは今なお生きたものである。では今日の我々は如何にして生けるキリストにつながるかと出来るか、その問に答える最も代表的な例は使徒行伝九章に於けるパウロの回心である。パウロは律法主義ユダヤ人として始めはクリスチヤンの一人や二人殺されるのをよしとする程ユダヤ教に熱心

なものであつた。パウロは多くのユダヤ人と共に、律法を完全に守ることによつて、神のメシヤは天より降り約束の国は与えられると信じていた。然るに、弟子たちは、十字架のイエスが神のメシヤであると云つた。従つて彼の眼から見ればイエスとその一派は仇敵の如き存在であつた。十字架の上に詛われたイエスを神のメシヤとするのは、神をけがし律法を根本から破る異端だからである。この異端を一掃するために彼はエルサレムを出発した。然し、迫害の場にあつて、実に喜びと確信に満たされて主を讚美しつつ死をも恐れぬイエスの弟子たちを見る時、パウロは何とも云えぬ焦燥を感じたであろう。一代の学者ガマリエルの優れた門下生として学問に於ても他に抜きんでていたパウロは、律法の行為の集積によつて、神の選民たるイスラエル民族が全人類に号令する日が来ると確信しながら、しかも律法の行為を厳格に行えば行う程、満たされない何ものかにかり立てられ、一層激烈な気象をイエスの弟子たちの迫害に向けたことである。ダマスコ途上、神の光は突如として彼のこの矛盾をえぐり出した。彼は地上に打ち倒された。彼の肉の眼は視力を失ひ、迫害に向う足はその支えを崩されてしまった。(未完)

半田記

讚美歌のあゆみ (三)

半田 信子

明治三十三年には一二五篇の共通讚美歌が成り、三十六年十一月には四八三篇(邦人の創作五四篇)の「さんびか」が完成出版された。これは約三十年間全日本のだんど凡ての教会で愛用された。四十二年十一月には、更に「さんびか」にもれたもの、家庭用、日曜学校用の讚美歌を加えたものが「さんびか第二篇」として出版された。(二五九篇)、大正三年に此のさんびか第一編、第二編は合本になった。大正の前半ばを過ぎた頃から、さんびかの再検討、改訂の希望があちこちに叫ばれる様になり、昭和六年十一月現行の讚美歌が刊行された。この讚美歌

の主な編纂委員の一人由木康先生は、古典的であるとともに近代的存在であり、日本的であるとともに国際的であり、実用であるとともに研究的である」と、のべている。

第二次世界大戦の諸情勢の変化は、更に讚美歌の改善補強を要求し、遂に昨年十二月新讚美歌の刊行をみるに至ったのである。改訂の主眼とするところは、教会の要求に応じて出来るだけ歌いやすく、使いやすい会衆用の歌集にすることであり、歌詞、曲共に大いに改善補強されている。此の讚美歌は一九四九年に着手され、満五年にしてその業をおえているが、これに

当った委員は、由木康、斉藤勇、山北多岳彦、鳥居忠五郎、松田幸一他十五名の諸氏である。(終)

小さき願い

苦しい時に、悲しい時に、
えみを忘れずに歌いゆくこ
とは非常にむずかしい事
ですが、重荷を負いて悩む
ものよ、我に來れ」とやさ
しい御手をさしのべて下さ
る主の御愛によつて、悩み
も苦しみも、希望と岳悦に
おきかえられて來た今日ま
でを深く心に思い、自分の
力では何もなし得ない弱い
愚かな者も、我を強くし
給うものによりて凡ての事
をなし得る”この御恩恵を
心から深く感謝するもので
す。

何時もほゝえみましよう
われら
首に在る身は何時も
ほゝえみましよう
曇りも晴れた日も

数年前にきゝおぼえた此
の歌を口づさむ毎に主の來
り給う日まで常に感謝と、
主にあるよろこびとにあふ
れて過し度いと願つて止
みません。

常によるこべ
絶えず祈れ

凡てのこと

感謝せよ

日曜集会案内
毎日曜日十一時より
水戸市東原町水戸幼稚園
ガラテヤ書研究半田
ヨブ記研究大森

商売と信仰

小貫武壽

昔から商人と云えば、ずるいもの、誤魔化されるもの、というのが一般の通念である様である。私にしてからが、やはり物を買う時は誤魔化されやしないか、うんと儲けられてるのかな？等と考える。之はやはりまづいことであるが、一般にそうであるのだから心配するのが当然であり、私達の所へ来るお客様がなかなか信用してくれないのも仕方がないかも知れない。書籍等になると、キチンと定価が決つているから、儲ける儲けないは出版社に責任があるので別に問

題は無い。所が纖維関係となると大変である。相場の変動によつて仕入れの高低があるから、同じ品も何時も同じに売れない場合がある。かと思つると同じ品を買つた都合で値段が違つてついでにすることを発見する場合もある。だから他の店と比較されてこの店は安いか、高いとか、いろいろの声を聞かされるので、信用第一にやつていてもなかなか難しいものであると云うことを最近しみじみ感じる様になつて来た。

併し、いろいろ少いけれども、今迄の経験ではやはり、ずるい気持を起した時は、それが必ず現れる様である。勿論、私の要領が下手なのかも知れぬが、私と云う人間は、要領よくやろうとすると失敗する様になつて了つたのか、要領を用いようとするやと気が悪く、あとに必ず変なものが残る様な気がしてならないのである。やはり誠をもつて正直に札をつけ、又、売るときは親切に客の云い分をよく聞いて納得して買って貰う様にすると云うことが一番大切である様だ。そうした時、その客は又来てくれる。今は非常に客が浮動する。値段が一寸でも高いと安い方で買うと云う傾向が強いのは、業者が多いせいでもあり、世の中の変

化でもある。併しよく考えて見ると、そうばかり云えない面が確かにある様である。であるから私は之からも人間の堅実な面、正直な面、そう云うところをとらえてPRして行きたいと考えているのである。自身自身のうちに絶えざる大きな誘惑が働いているので、失敗は之からも多いことであらうと思ふけれども、やはり誠意、努力、勤勞、之が信用を形作るキイポイントではなからうか。

商人はずるいもの、誤魔化すもの、という既成觀念を打破する為に少くとも私の店をそんな店にしたいと思ふ。それが又信仰の実践であらうと私は信ずるのである。

結婚（その一）

大森孝夫

二十代の終りにある私にとつて「結婚」ということは、誠に重要な問題の一つです。いわゆる結婚適令期という年代にあつては、本人よりも周囲の人がこの問題に対して躍起となることがあります。私はこれらの人達の言動に支配され、結婚という一つの人生に於ける行事とか生活上の便宜問題とは考えません。また本能的な索引といったことを頭から無視は致しません。恋愛の延長問題などとも考えません。ヘブル章一三章四節にありますように結婚は貴ぶべきものであると共に邪曲なる結婚こそ恐るべきものです。本

当に結婚こそヒルテイの述べた如く神聖なものだと思ひます。私たちは安易・無責任な結婚、本能・性欲のおもむくまゝの結婚の末路が悲惨であり如何に社会・国家を毒するものであるかの例を見るまでもなく、キリスト者として神の御心に適う誠の結婚の道は如何なるものであるかを真剣に学びとらねばならないと思ひます。そして一段とこの学びは私にとつて痛烈に要求されることなのです。結婚問題は現在私に具体的な形となつて肉薄しております。而して私の結婚観は周囲がキリスト教と隔絶した雰囲気であると共に、私自身の薄信の為に非常な困難な場面に遭遇しているの

す。誇張なしに結婚問題は私にとつて戦いなのです。無論困難の度の増す毎に勝利への確信は深まつて参りますが、一方サタンの誘惑は加速度的にその度を強めてきているのです。神の御定めになられた結婚の道に關して、私たちは聖書によつて学びとることができません。私の結婚観は神の御言を聖書に基礎を置きます。即ち私は創世一・27、二・18〜24、三四・9、詩七八・63、マタイ一九・4〜6、二二・25〜33、マルコ一〇・6〜9、ロマ七・2、コリント前七、エペソ五・22〜23、コロサイ三・18、テモテ前四・3、テトス二・4、ヘブル一三・4、ペテロ前三・1〜4、黙示一九・7〜9等々から結婚の道を学びました。信仰に入ら

せて頂いてから約一年、聖書知識の浅い私ですから、これらの聖句の深い学的解釈や神学上の議論は何一つ知りません。然しこれらの聖句より結論として学びとることは先に「祈り」について学び得た結果（本誌一〜三号参照）と全く同じく、結婚もまたキリストのため、神の御栄のためであり、ただただ神の聖意の成らんことを願うため以外何一つ混入してはいけないということとであります。勿論、一方的独断、偏狭な結論は排さなければなりません。この結論は神によれる結論であるが故に真理であります。即ち結婚は利益問題ではありません。世俗問題、性欲問題ではありません。実に信仰問題であります。

（続く）

荒野についての序論(四)

石原秀志

新しき葡萄園は「今や小より大に至る迄悉く我を知る」民によつて形成される沃野であつた。それは地的な沃野に()ぬことによつて与えられた天的な沃野であつた。そしてその時以來、イスラエルの望む「乳と蜜の流るゝ地」は永遠なる御言の支配する国へと飛躍したのである。ヘブル書記者の表白する如く「されど彼等の慕う所は天にある更に勝りたる所」であつた。故に「地にては旅人また寓れるものなるを言い表し」たのであつた。

それではその時以后イスラエルは地にある沃野を全く見棄て、了つたのである

うか。彼等が今に至る迄旅人また寓れるものとして歩んで来た事は歴史の示す所である。併しほんとに神の民とせられた者は、此の世界も亦創造者の御手の業である事を知る故に、旅人、寓れる者にとつて此の世界がどうでもよいとする事は出来ない。「荒野とうるおいなぎ地とは楽しみ砂漠はよろこびて番紅(サフラン)の花の如くに咲きかゞやかん」(イザヤ三五)という歌は、不毛の荒野もいつの日にか豊かなる沃野に生れ変わる時が来るであろうというイスラエルの希望と確信との表白であり、「幸福なる哉柔和なる者、その人

は地を嗣がん」とイエスの語り給うた時に、神の国を嗣ぐ者は同時に地を嗣ぐ者であることが教えられたのであつた。神の民として生きることは同時にほんとの意味で我等の住む此の世界を活し、「そこを多くの泉ある所となす」(詩八四篇)ことなのである。

キリストにあつて罪赦されて新しき者、神の国の民とせられた者にとつての最大の願望は新しき天と新しき地との出現であり、我等の主イエス・キリストの救い主として再び来り給うことである。(ピリピ三章)

その時我等の凡ての労苦は終り、永遠の嗣業に与る者とされるであろう。

その意味で我等の眼は地にあるものより転じて上に向けられる。イスラエルも再び荒野に立たしめられる事によつて深く此の事を学んだ。然も我等の現実の生は此の地の上に続けられねばならない。祖国を亡失して流浪の民族となつたイスラエルにとつても事情は同じである。やがてイスラエルはその中より「もろもろの人を照す眞の光」を産み出す光榮を担つたが、彼等は自らその光榮を否んだ。かくて今も尚彼等は荒野の途を歩みつゝある。彼等は主なる全能の神を拝するが、イエス・キリストの父なる神を知らない。「異邦人の入り来りて、数満つるに及ぶ時」(ロマ一章)迄彼等の此の荒野は続くであろう。福音を知らないイスラエルとは異つた意味で、キリストにあつて我等も旅人として此の世を歩ましめられる。我等をしてその歩みを支え続けさせるのは唯

イエス・キリストに於て顯れた限らない恩恵と憐憫とに対する信頼と感謝である。如何に我等の生の荒野が險しく行路難であつても、我等をキリストの愛より離れしむるものは誰であるかとの確信をもつて。(ロマ書八章)

我等が衷なる罪の力強さに打ち倒された時に、我等もイスラエルと同じく歩み來つた沃野に死んだのである。しかし同時に、キリストの圧倒的な愛が我等に迫り我等を再び活した時に、一度我等にとつても死んだものとなつた沃野は新しき姿をもつて我等の前に現れ來つた。併し我等は既にキリストにあつて上にある沃野を知り、之を待望む。かくて我等は荒野を歩みつゝ二つの沃野に挟まれて生き

る。其の沃野と地の沃野と。

沃野に於て人は多くの生産を見出す事が出来るが、荒野はそれ自体不毛であつた。併し荒野が沃野に觸れる時、そこに新しい生産の場が生れる。我等の荒野も唯眞実の信頼を通して天的沃野によつて活かされ養われる。同時に、我等の荒野が地的沃野に觸れる時に、罪赦されし者の感謝と謙遜とが、此の地をもほんとの意味で活し、豊なる生産を齎すに至るであろう。「地を嗣ぐ者」のみがほんとの意味で地を活しうるのである。

(おわり)

後記

○今月は石原先生の「いけるキリストの信仰」を二頁

に亘つて掲載することが出來た。筆記が稚拙な為にあの活々した講演の千分の一も伝えることが出来ない。信仰は言葉を媒介とするようで、然も生命の直接的な受授だということいよいよ痛切に感ずる。

○石原兄の「荒野についての序論」は今月で終了する。農学を専攻して茨城大学に教鞭を取っている兄の砂漠に関する考察は、終章の中に深い信仰体験を語っている。現実を神を通して我らにすべて益となるであろう。修道院の隱遁的生活が信者の理想でないことをイスラエルは数百年に亘つて経験してきたのだ。

○大森兄の「結婚」は兄の直面する現実から生々しい信仰告白を語るだろう。我らの越ゆべき障害は山の如くある。然し主は我らに耐

え難き荷をを負け給うことがなかつた。

○愈々來月九日十日十一日の三日間黒崎先生をお迎えして夏期講習会が義公ゆかりの地太田市西山研修所で開かれる。キリストと共に歩む者には常に希望と歡喜とがある。

(半田)

昭和三十年六月 発行

水戸無教会第四号

実費十円下共

編集兼印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原町四六四二

水戸幼稚園内

水戸無教会